

第1期中期目標期間の達成状況に関する評価結果

富山大学

平成23年5月

独立行政法人大学評価・学位授与機構

(I) 教育に関する目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】 中期目標の達成状況がおおむね良好である

(判断理由) 「教育に関する目標」に係る中期目標（4項目）のうち、1項目が「良好」、3項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

(参考)

平成16～19年度の評価結果は以下のとおりであった。

【評価結果】 中期目標の達成状況がおおむね良好である

(判断理由) 「教育に関する目標」に係る中期目標（4項目）のうち、1項目が「良好」、3項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

2. 各中期目標の達成状況

① 教育の成果に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況がおおむね良好である

(判断理由) 平成16～19年度の評価結果は「教育の成果に関する目標」の下に定められている具体的な目標（4項目）のうち、2項目が「良好」、2項目が「おおむね良好」であったことから、「中期目標の達成状況がおおむね良好である」であった。

平成20、21年度の達成状況を踏まえた結果は、2項目が「良好」、2項目が「おおむね良好」とし、これらの結果に加え、学部・研究科等の現況分析における関連項目「学業の成果」「進路・就職の状況」の結果も勘案して、総合的に判断した。

<特記すべき点>

(優れた点)

- 中期計画「医学、薬学、理学、工学を融合した、生命科学の領域における研究者並びに高度専門職業人の育成を図る」について、理系大学院の再編により大学院生命融合科学教育部を設置し、医学・薬学・理学・工学を融合した生命科学関連の領域横断的教育を推進した結果、学生の領域横断的な研究能力・発表能力の向上が認められており、多様な社会の要請に対応できる人材養成が図られていることは、優れていると判断される。
- 中期計画「独創的な研究開発能力と高度な専門的職業能力を持つ創造的人材の育成を図る」について、研究遂行能力や研究発表能力の向上を図るために成果のあった学生には修了時に顕彰を行うなど、各研究科及び教育部で様々な取組を実施した結果、理工学教育部・理工学研究科や医学薬学教育部・医学系研究科・薬学研究科において、

学生による論文発表や学会発表が多数行われ、また、各研究科や教育部の修了生の多くが研究職や専門職に就いているなど、研究を通じた教育が実践されていることは、優れていると判断される。

(特色ある点)

- 中期計画「すべての部局が協力して教養教育に参加することなどにより、多様な分野を教育内容に反映させる」について、3大学統合のスケール・メリットを生かした科目として「立山マルチヴァース講義」を開講し、多様な分野を教養教育に反映させる試みが行われていることは、特色ある取組であると判断される。

② 教育内容等に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況がおおむね良好である

(判断理由) 平成16～19年度の評価結果は「教育内容等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(7項目)のうち、1項目が「非常に優れている」、1項目が「良好」、4項目が「おおむね良好」、1項目が「不十分」であったことから、「中期目標の達成状況がおおむね良好である」であった。

平成20、21年度の達成状況を踏まえた結果は、1項目が「非常に優れている」、1項目が「良好」、5項目が「おおむね良好」とし、これらの結果に加え、学部・研究科等の現況分析における関連項目「教育内容」「教育方法」の結果も勘案して、総合的に判断した。

<特記すべき点>

(優れた点)

- 中期計画「少人数教育、対話型教育などを重視した授業形態や学習指導方法を取り入れる」について、全学部において少人数・対話型教育を実施し多くの学生が受講していること、「e-Learning 授業支援システム」を整備し、システムの利用が年々増加していることは、学生の自学自習力の向上が見られる点で、優れていると判断される。
- 中期計画「社会の現場で活用できる実践的な能力・技能を育むために、実社会における課題に関連した科目設定及び履修システムを導入する」について、地域社会との連携による実社会における課題に関連した授業科目を開講し、相当な数の学生が受講していることや、実用的な能力を認定するための語学検定試験を活用した単位認定を行っていることは、実践的な能力・技能を育む点で、優れていると判断される。
- 中期計画「補習授業など特定の分野・科目については適切な授業実施が可能となるよう、教材や授業方法の開発を行う」について、入学前教育、補習授業や情報処理教育のための教材開発・教育方法の改善において、入学前準備学習の研究を行い教材を改善するとともに、入学後の成績を調査し効果の検証をしていること等は、新入生の

学力に応じた教育プログラムを実施し、学生の成績分布等により効果を検証し改善するという PDCA サイクルが実施されている点で、優れていると判断される。

（平成16～19年度の評価で指摘した「改善を要する点」の改善状況）

- 平成 16 ～ 19 年度の評価において、
中期計画「大学全体のアドミッション・ポリシーを確立し、それに応じて各学部
のアドミッション・ポリシーを見直す」について、大学全体のアドミッション・
ポリシーの確立がいまだなされていないことは、各学部の現在のアドミッション
・ポリシーが暫定的なものと考えられることから、改善することが望まれる
と指摘したところである。
平成 20、21 年度においては、大学全体のアドミッション・ポリシーを確立して、そ
れに応じて各学部において、アドミッション・ポリシーを見直していることから、当
該中期計画に照らして、改善されていると判断された。

（顕著な変化が認められる点）

- 中期計画「大学全体のアドミッション・ポリシーを確立し、それに応じて各学部の
アドミッション・ポリシーを見直す」について、平成 16 ～ 19 年度の評価においては、
各学部の現在のアドミッション・ポリシーが暫定的なものである点で、「不十分」であ
ったが、平成 20、21 年度の実施状況においては改善されており、「おおむね良好」と
なった。（「平成 16 ～ 19 年度評価で指摘した「改善を要する点」の改善状況」参照）

③ 教育の実施体制等に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

（判断理由） 平成 16 ～ 19 年度の評価結果は「教育の実施体制等に関する目標」の
下に定められている具体的な目標（6 項目）のうち、1 項目が「非常に
優れている」、3 項目が「良好」、1 項目が「おおむね良好」、1 項目が「不
十分」であったことから、「中期目標の達成状況が良好である」であった。
平成 20、21 年度の達成状況を踏まえた結果は、1 項目が「非常に優れ
ている」、3 項目が「良好」、2 項目が「おおむね良好」とし、これらの
結果に加え、学部・研究科等の現況分析における関連項目「教育の実施
体制」の結果も勘案して、総合的に判断した。

＜特記すべき点＞

（優れた点）

- 中期計画「社会の要請の変化や研究の高度化・学際化に柔軟に対応できるように、
教育研究組織の在り方を検討する」について、3 大学（富山大学・富山医科薬科大学
・高岡短期大学）の統合を契機として理系大学院の教育研究組織の在り方を検討した
結果、理系大学院の再編制により生命融合科学教育部を設置し、新たな学問領域の創

出や学術研究の高度化・活性化を図ったことは、優れていると判断される。

- 中期計画「大学院の 10 月入学制度の導入を更に推進する」について、留学生の大学院入学の現状改善要望に応えた 10 月入学制度の導入により、アジア諸国からの留学生の秋季入学が増加したことは、留学生のニーズに対応し、大学院の活性化につながる点で、優れていると判断される。
- 中期目標で「教育環境を整備する」としていることについて、「双方向遠隔授業システム」や「e-Learning 授業支援システム」、他大学との単位互換システムが整備され、これらを利用する授業科目の履修学生の数が増加していることは、3 キャンパス（五福キャンパス・杉谷キャンパス・高岡キャンパス）や富山大学を越えた広い学習機会を学生に提供している点で、優れていると判断される。また、3 大学統合に伴う課題を克服した図書館の環境整備が進められ、電子ジャーナルの利用者数が増加していることも、図書館の整備充実と利用促進がなされている点で、優れていると判断される。
- 中期計画「学生による授業評価を継続的に実施する」について、学生による授業評価アンケートや聞き取り調査を実施し教育効果の検証を行うとともに、その結果を教授会等を通じて教員にフィードバックするとともに、教育改善に活用する体制を整備していることは、教育の実施体制における PDCA サイクルを実現している点で、優れていると判断される。

（平成16～19年度の評価で指摘した「改善を要する点」の改善状況）

- 平成 16 ～ 19 年度の評価において、

中期計画「教養教育の企画・立案・評価を担当し、実施の指揮にあたる組織の充実を図る」について、教養教育の充実のための検討が開始されているが、共通教育統合の基本方針の決定にとどまっておろ、組織・体制の整備・充実が十分に進捗しているとはいえないことから、改善することが望まれると指摘したところである。

平成 20、21 年度においては、教養教育改革室を設け、現行のカリキュラムと実施体制の検証に取り組み、また、3 キャンパスの教員が相互に協力して教養教育科目を充実させる体制を整備していることから、当該中期計画に照らして、改善されていると判断された。

（顕著な変化が認められる点）

- 中期計画「教養教育の企画・立案・評価を担当し、実施の指揮にあたる組織の充実を図る」について、平成 16 ～ 19 年度の評価においては、組織・体制の整備・充実が十分に進捗しているとはいえない点で、「不十分」であったが、平成 20、21 年度の実施状況においては改善されており、「おおむね良好」となった。（「平成 16 ～ 19 年度評価で指摘した「改善を要する点」の改善状況」参照）

④ 学生への支援に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況がおおむね良好である

(判断理由) 平成 16～19 年度の評価結果は「学生への支援に関する目標」の下に定められている具体的な目標（4 項目）のうち、1 項目が「良好」、3 項目が「おおむね良好」であったことから、「中期目標の達成状況がおおむね良好である」であった。

平成 20、21 年度の達成状況を踏まえた結果は、1 項目が「良好」、3 項目が「おおむね良好」とし、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>

(優れた点)

- 中期目標で「学生への支援」としていることについて、学生の学習支援及び生活支援において、助言教員等制度の整備や、学外からも閲覧可能な新学務情報システム「ヘルン・システム」の導入、学生関係業務におけるワンストップサービスの実現、学生支援センター、トータルコミュニケーション支援室の設置、保護者との懇談会が開催されていること等は、学生個人のクラススケジュールの支援等、学生に対する丁寧な学習支援の実現・充実や、豊かなキャンパスライフのための学生相談・支援体制が整備されている点で、優れていると判断される。

(特色ある点)

- 中期計画「キャリア教育の充実を図り、就職指導體制を整備する」について、三つのキャンパスに学生が分かれていることに配慮し、各キャンパスでビジネスマナー講座を開設するとともに、五福キャンパスでは文系及び理系学部生向け、高岡キャンパスでは芸術文化学部生向けの就職ガイダンスをそれぞれ開催するなど、学生が利用しやすい支援が行われており、実際に全学部合計で就職ガイダンス等の参加者が平成 20 年度 4,131 名から平成 21 年度 7,620 名に増加した点で、特色ある取組であると判断される。
- 中期計画「実社会との連携（インターンシップ等）を拡充し、職業観・勤労観の育成を図る」について、平成 20 年度新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラムに「富大流人生設計支援プログラム」が採択され、インターンシップ参加学生が富山県内中学校の「14 歳の挑戦」生徒指導ボランティアとして参加することにより、大学生は自らの成長を省みる機会を獲得し、中学生は数年先のキャリアターゲットとなる大学生と触れ合うことで将来像を獲得するという、キャリア教育の学びの循環の実現を進めている点で、特色ある取組であると判断される。

(顕著な変化が認められる点)

- 中期計画「キャリア教育の充実を図り、就職指導体制を整備する」について、平成 16～19 年度の評価においては、「おおむね良好」であったが、平成 20、21 年度の実施状況においては、「良好」となった。（「特色ある点」参照）

（Ⅱ）研究に関する目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

（判断理由） 「研究に関する目標」に係る中期目標（2 項目）のすべてが「良好」であることから判断した。

（参考）

平成 16～19 年度の評価結果は以下のとおりであった。

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

（判断理由） 「研究に関する目標」に係る中期目標（2 項目）のすべてが「良好」であることから判断した。

2. 各中期目標の達成状況

① 研究水準及び研究の成果等に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

（判断理由） 平成 16～19 年度の評価結果は「研究水準及び研究の成果等に関する目標」の下に定められている具体的な目標（3 項目）のうち、1 項目が「非常に優れている」、2 項目が「良好」であったことから、「中期目標の達成状況が良好である」であった。

平成 20、21 年度の達成状況を踏まえた結果は、1 項目が「非常に優れている」、2 項目が「良好」とし、これらの結果に加え、学部・研究科等の現況分析における関連項目「研究活動の状況」「研究成果の状況」の結果も勘案して、総合的に判断した。

<特記すべき点>

（優れた点）

- 中期計画「人文、社会、自然科学研究の共同プロジェクト化、ネットワーク化を図り、先端的研究を推進する」について、学長裁量経費により異分野融合型の学内共同プロジェクトを優先的に支援していること、異分野研究者間の交流のための多様な企画が実施され、複数部局による共同プロジェクトの支援の拡大や、産学官連携による研究会や研究報告などの定期的な開催により、研究者交流が図られている。また、21 世紀 COE プログラム「東洋の知に立脚した個の医療の創生」における南京中医薬大学

等との共同研究等、他大学や他研究機関との共同研究プロジェクトの実施等の実績が上がっていること等は、異分野間の融合による新たな先端的研究を推進している点で、優れていると判断される。

- 中期目標で「医薬理工学及び伝統医薬学領域を中心として、国際社会をリードする特色ある先端研究を行う」としていることについて、生命科学、情報科学、材料・ナノ科学、環境科学の分野で国際的にも評価された研究を推進し、21世紀 COE プログラム「東洋の知に立脚した個の医療の創生」や科学技術振興機構（JST）戦略的創造研究推進事業（CREST）の脳の高次機能に関する研究の下での医薬理工及び人文社会系（生態人類学）を含んだ東洋の伝統医薬学と西洋の医療の融合による研究を推進していることは、優れていると判断される。
- 中期目標「地域や産業界との連携を深めながら、社会の要請に応え得る研究活動を展開し、研究成果を広く還元する」について、富山県との包括的連携協定の締結により、研究推進とその成果還元に関し県との連携と協力を図る体制の整備や、研究成果を発掘し産業界への技術移転を促進させ共同研究の増加を目指す、知的財産本部及び当該本部内への内部型技術移転機関（TLO）の設置により、共同研究と受託研究の件数と金額が年々増加している。さらに、リエゾンフェスティバル、イブニング技術交流サロン、フォーラム富山「創薬」、とやま産学官交流会等の定期開催を通じて、富山大学の研究成果を県内の企業に紹介するとともに、伝統工芸の盛んな高岡市における工芸展等の開催や文化財の修復等により、研究成果を地域社会の活性化に活かしていることは、積極的な取組が着実に成果を上げている点で、優れていると判断される。

（特色ある点）

- 中期計画「次世代エネルギー（核融合、水素エネルギー）の研究開発を推進する」について、国内の大学で最大量（15,100 キュリー／年）のトリチウムの使用が可能な我が国で唯一の中核研究機関である水素同位体科学研究センターにおいて、次世代エネルギーに関わる核融合科学とトリチウムの安全取扱い技術及び閉じ込め技術の構築を達成するための研究を推進していることは、特色ある取組であると判断される。

② 研究実施体制等の整備に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

（判断理由） 平成 16～19 年度の評価結果は「研究実施体制等の整備に関する目標」の下に定められている具体的な目標（5項目）のうち、3項目が「良好」、2項目が「おおむね良好」であったことから、「中期目標の達成状況が良好である」であった。

平成 20、21 年度の達成状況を踏まえた結果は、3項目が「良好」、2項目が「おおむね良好」とし、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>

(優れた点)

- 中期目標で「研究環境の整備」としていることについて、学長裁量経費に戦略的経費を設定し、重点的に取り組む領域の体制整備や、学長裁量経費のうち「研究活性化経費」による若手研究者の萌芽的研究を支援したこと、研究用設備整備に関する設備整備マスタープランを策定し、その実現に向けて運営費交付金、外部資金及び概算要求を活用して資金獲得に努力し、学長裁量経費からも支援していることは、優れていると判断される。

(特色ある点)

- 中期計画「科学研究費補助金、自治体・企業・財団等からの研究奨励費などの外部資金の獲得を促進するための体制を整備する」について、科研費獲得増戦略ワーキンググループにおいて科学研究費補助金の獲得を増やすための方策を検討し、説明会の開催や相談窓口の設置に加え、非申請者にはペナルティを課すなどの取組を実施した結果、平成 18 ～ 20 年度分の申請件数が毎年増加したことは、特色ある取組であると判断される。

(Ⅲ) その他の目標

(1) 社会との連携、国際交流等に関する目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「社会との連携、国際交流等に関する目標」に係る中期目標（1項目）が「良好」であることから判断した。

(参考)

平成 16 ～ 19 年度の評価結果は以下のとおりであった。

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「社会との連携、国際交流等に関する目標」に係る中期目標（1項目）が「良好」であることから判断した。

2. 各中期目標の達成状況

① 社会との連携、国際交流等に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 平成 16 ～ 19 年度の評価結果は「社会との連携、国際交流等に関する

目標」の下に定められている具体的な目標（5項目）のうち、1項目が「非常に優れている」、1項目が「良好」、3項目が「おおむね良好」であったことから、「中期目標の達成状況が良好である」であった。

平成20、21年度の達成状況を踏まえた結果は、1項目が「非常に優れている」、1項目が「良好」、3項目が「おおむね良好」とし、これらの結果を総合的に判断した。

＜特記すべき点＞

（優れた点）

- 中期目標「各種の医療機関や福祉施設と連携・協力して地域社会に貢献する」について、附属病院、地域の利用機関及び福祉施設との密接な連携協力体制が構築され、医療機関との連携の指標である紹介・逆紹介率が向上していることや、和漢医薬学総合研究所を中心に、伝統医薬（和漢薬）に関する研修会やセミナーの開催等オピニオンリーダーとしての役割を果たすとともに、漢方薬に関する疑問に答える「漢方Q&A」をまとめ、ウェブサイトで公開し注目を集めていること、富山県、地域薬業界との連携による共同創薬研究が進み、富山オリジナルブランド医薬品を開発し、販売するまでに至ったこと等は、地域社会に貢献した成果が上がっている点で、優れていると判断される。
- 中期計画「講義概要や研究成果などのデータベース化及び公開を推進すると共に、インターネットを利用した遠隔学習環境を整備する」について、学術情報リポジトリ、電子シラバス等の整備により、大学情報を積極的に発信するとともに、インターネットを利用した遠隔授業を実施していることは、地域・社会への貢献へ向けた整備がされている点で、優れていると判断される。

（特色ある点）

- 中期計画「地域の高校と連携した公開授業や小中学生を対象とした講座を開設し、地域の教育機関との連携を図る」について、富山県教育委員会との連携により、富山大学の教員志望の学生を県内の小中学校に派遣し、放課後の児童生徒の個別指導や教育相談活動の補助を行うなど、学校のニーズに対応するとともに、学生の資質・能力の向上を図っていることは、特色ある取組であると判断される。
- 中期計画「交流協定大学に設置した富山大学ブランチを海外拠点として活用する」について、北京大学には富山大学の出身者が多いことを活用し、医薬系分野を中心に中国との交流を活発に行い、国際交流・貢献の拠点機関として先導的な役割を果たしていることは、特色ある取組であると判断される。